

岑 参 評 傳 二※

廖 立 著
藤 井 良 雄 訳注

(平成七年九月十一日受理)

二、「嵩陽に隠る」

3、田園詩

岑参の第一作目の詩は何年に作られたのであろうか。今ではもう調べようがない。ただ、彼が作詩を始めたのは、「二十にして書を闕下に献ず」の前後のはずで、すなわち開元二十二年(七三四)頃である。その時、彼はちょうど現在の登封県境の太室山・少室山二山の附近に住んでいて、太室山の詩および少室山での生活の詩がおそらく彼の最も早い詩作であらう。

岑参の後年の追憶の中では、晋州(山西省臨汾市)の生活が影を留めていることは非常に稀であり、「此地曾つて居住し、今来れば宛も帰るに似たり」(「平陽郡の汾橋邊の柳樹に題す」¹⁾)の表現以外、ほかには何も見つけられない。それで「十五にして嵩陽に隠る」の後、彼の生涯の中で記憶鮮明であるばかりでなく、多くの詩歌を残しており、これら

の詩の大部分が山水田園詩である。

自然の風光や山林の魚鳥は、憂鬱なる世俗の生活と対照的に、いつも人から羨望せられ、よく人々の高潔なる心情を引き起こす。しかし、さまざまの詩人の筆致のもとでは、同じ山水田園もやはり色々な姿や情調を持つはずである。大自然は客観的な存在ではあるが、この自然を感受する主観的インスピレーション²⁾は決して同一なものではない。岑参の山水田園詩は、他人とは異なる彼の感受性を通して表現されたものであり、それで彼自身の特徴を持つ。試みに「潘陵尖より少室の居止に還り、秋の夕べの憑眺」³⁾詩中に描く山居の風光をみてみよう。

草堂近少室 草堂 少室(山)に近く

夜静聞風松 夜静かにして風松を聞く

月出潘陵尖 月 潘陵尖より出で

照見十六峯 十六峯を照らし見わす

九月山葉赤 九月 山葉赤く

溪雲淡秋容 溪雲 秋容淡し

火點伊陽村 火點ず 伊陽の村
煙深嵩角鐘 煙深し 嵩角の鐘

……中略……

昨詣山僧期 昨は詣ず 山僧との期
上到天壇東 上りて天壇の東に到る
向下望雷雨 下に向へば雷雨を望む
雲間見回龍 雲間に回龍を見る
久與人羣疏 久しく人羣と疏にして
轉愛丘壑中 轉た愛す 丘壑の中
心淡水木会 心淡し 水木の会
興幽魚鳥通 興幽かに魚鳥と通ず

……後略……

これは純真ないまだ雕琢を加えないインスピレーションであり、これは質朴で雄大なる自然である。詩人（詩中）には「尚子見ゆべからず、蔣生再び逢ひ難し」、「況んや本より宦情なきをや、誓ひて將に道風に依らんとす」などの詩句があり、それは詩人が隠逸であり道家に帰依することを誓め贅えていることを表明する。これは一つの人生のあり方で、「高きよりの眺望」から自然に湧き起こった内心の感想である。直接に言い出した話は当然詩人自身が言いたかった話であり、彼の思想を表現している。しかし、詩歌創作の藝術という角度からみれば、詩を作るのは当然、宣言を発表するのとは異なっており、公に向けて言われた話は往往にして外面に浮き出た露わなものであり、その言い出さなかったもの、自然風光の詩句の背後に隠されたものこそ、詩歌という藝術の真の内容となり、それこそ詩人の自然の風光に対する独特の感受性である。自然の風光をとおして顕著になる素朴さ、おおらかさがつまり詩人の独

特の感受性であり、すなわち彼の内心のインスピレーションである。

さらに、「春、河陽の聞處士の別業を尋ぬ」という詩があり、岑参の早期の山水田園詩の特徴をはっきりと認めることができるであろう。

風暖日暎暎 風暖かく日は暎暎
黄鸝飛近村 黄鸝 近村に飛ぶ
花明潘子縣 花明かなり潘子の県
柳暗陶公門 柳暗し 陶公の門
藥碗搖山影 藥碗 山影搖らぎ
魚竿帶水痕 魚竿 水痕帶びたり
南橋車馬客 南橋 車馬の客
何事苦喧喧 何事ぞ 喧喧たるを苦しまんや

我々が奇異に思わざるをえないのは、岑参が「早歳にして孤貧」の中に在って、詩を作り意外にもこれまで「饑え来たり我を駆り去る」という表現もなければ、「豈に實に辛苦ならざらんや」の感慨もなかったことである。ここには、あたかも俗世間の憂いをきれいさっぱり排いのけてしまったようで、処士の生活には、風穩やかに日うちらるか、黄鸝さえずり飛び、柳おい茂り花咲き乱れ、山美しく水清らかということしかなかった。南橋を通る馬車が少しさわがしかったが、しかしこれはとがめられ、処士の生活の外へと取りのけられ、詩人の心の外へ取り除かれた。もし年若い詩人のインスピレーションを深い山中の澄み切った溪流に譬えたとすれば、この溪流にはその源から土砂濁流も入っていないばかりでなく、さらに山中の腐った木の葉や枯れ枝もなかったことになる。詩人のインスピレーションは本当に単純で、もうこれ以上単純になりようがなかった。また別の「鞏縣の南、李處士の別居を尋ぬ」詩にも、同じような風格があつて、詩の中に「田に灌ぐは同じく一泉」という句があ

るけれども、これは農事と何ら関係なく、また現実の物質的生活と全く関係がない。詩人の着眼点は次にある。

桑葉隠村戸 桑葉 村戸を隠し

蘆花映釣船 蘆花 釣船に映ず

有時著書暇 時有りて著書の暇

盡日窗中眠 尽日 窗中に眠る

これは自得の境地であり、憂いもなく心配もない胸懷である。仕官する以前、長安の終南山の麓に隠栖していたときの詩「灋頭にて蔣侯を送る」・

「終南東溪口の作」にも同様の傾向がある。

素朴・素直・単純であること、これが岑参の早期山水田園詩の風格であり、これらの詩に内在するスピリットである。風格がすなわちスピリットである。

この点と関係して、岑参の早期の詩作中で、意識的にか無意識的にかハーマニー感すなわち藝術上の調和、インスピレーション上の調和を追求しているかのようだ。「鞏縣の南、李處士の別居を尋ぬ」詩中、茅屋・桑樹・蘆の花・釣り船などのような客観的景色と、李處士が書を著し昼寝をするような人事の表現とが調和して織りなされている。李處士の生活環境・起居動作が詩人自身のインスピレーションの感受性とも調和して織り合わさっている。この「春、河陽の聞處士の別業を尋ぬ」詩では、喧騒さがやまぬ南橋を行き交う車馬それらが風暖かく日和りの花盛りで抑おい茂った聞處士の生活の画面の中に不意に飛びこんでいるが、ただそれがとがめを受けたことで、画面はやはり調和してととのつて、詩人のインスピレーションも統一されており、何ら矛盾した要素は決して存在しない。「潘陵尖より少室の居止に還りて秋の夕べの憑眺」詩中では、自得の境地にあつて、「尚子見ゆべからず、蔣生再び逢ひ難し。勝

慨只だ自から知るのみ。佳趣誰が為に濃ゆし。」の詩句で表現するのは、あたかも円満の中に欠落を出現させ、調和の中に逆流を出現させたかのようであるが、しかしこれも実のところ自得の境地である。というのは、このような情緒はもととただ「自から知り」さえすれば、他人が関わってくることは決して要求されはしないからである。調和し、統一され、矛盾もなく衝突もない、これがある単純な気持ち、渾然として区別されない境地であり、また幼稚純真なあどけなさでもある。

陶淵明の『田園の居に歸る』詩に表現される自然に対する感受性と比較することができる。其一。

少無適俗韻 少きより俗に適うの韻なく

性本愛丘山 性もとより丘山を愛す

……

曖曖遠人村 曖曖たり遠人の村

依依墟里烟 依依たり墟里の煙

狗吠深巷中 狗は深巷の中に吠え

鶏鳴桑樹顛 鶏は桑樹の顛きに鳴く

戶庭無雜塵 戶庭に 塵雜無く

虛室有余閑 虛室に余閑有り

久在樊籠里 久しく樊籠の裏に在りしも

復得返自然 復た自然に返るを得たり

陶淵明の詩も素朴で、インスピレーションも純真であり、ここから岑参が前人から学んだものを見てとれよう。ただ、細かく細かく陶詩中の田園の風景に対する咏嘆を味わってみれば、われわれは次第にある淡淡とした哀愁がその中に隠されているのを感じるのであり、岑参の詩はこの点で非常に異なっている。例えば陶淵明の詩の其二「野外 人事罕れな

り」という詩章では、その結末聯に

常恐霜霰至 常に恐る 霜霰の至って

零落同草莽 零落して草莽に同じからんことを

と詠い、其三の結末聯に

衣霑不足惜 衣の霑るるは惜しむに足らず

但使愿無違 但だ願いをして違ふこと無からしめよ

といっている。

どうして「恐」れることがあるのか。どうして「惜」しむことがあるのか。この間にこそある抑圧感（重苦しさ）が存在する。これは素朴・純真なものでありながら艱難辛苦をなめ尽くした心である。さらに「飲酒」詩は、こうも云っている。其五は、

問君何能爾 君に問う 何ぞ能く爾ると

心遠地自偏 心遠く地自から偏なり

と詠い、

此中有真意 此中に真意有り

欲辨已忘言 辨ぜんと欲して已に言を忘る

と云っている。昔ある評論家（王国維）は、これは「無我之境」であり、最高の境界であると言った。しかしながら、詩中で「我」がとり除かれること、その努力の痕跡すなわち「心遠ければ」ということ、「辨ぜんと欲す」ということが残されており、その事情がうかがわれる。ここにもある抑圧感が隠されている。陶淵明の詩には、藝術上当然彼の内在的調和があるが、しかしこのような抑圧感が反って楽章中の変音となり、これが岑参の詩と異なっている。陶淵明には「猛志」がないなどありえようか。しかし、彼がああ時代に處するには、彼は田園に帰隱するほかなく、ここに本当にやむを得ない事情があった。岑参は盛世すなわち天

下太平の時代に處し、世事に未経験の青年の心には幼稚純真なるあどけなさが保持されており、これによって岑参の詩は山中の清らかな泉のようであったのである。

岑参と同じ時代の王維、彼の筆になる自然の風景にも抑圧感はない。例えば、

江流天地外 江流天地の外

山色有無中 山色有無の中

や、

行到水窮處 行いて到る水の窮まる處

坐看雲起時 坐して看る雲の起る時

（「終南別業」⁽¹⁾）

など、これらの詩句の中で、主観的な感受性は画面そのものにしか存在せず、この外には全く有りえない。詩人は決して何ものをも追い求めず、力を込める必要もなかったのは当然であり、自然そのままの画面が唯一の目的である。又、『輞川集』の「鹿柴」⁽²⁾と「竹里館」⁽³⁾のような作品も、すべて所謂「無我之境」であり、詩人の心はひたすら池の清水のなのであり、自然の風景はその中に投影されて、おのずとこのような閑かで暢やかな空寂とした画面が生み出された。このような詩章を作る人は、あたかも（仙人のように）俗世間の普通の食事を口にせず、この汚れた世と少しも関わらない人のようである。たとえば「渭川の田家」⁽⁴⁾詩中の野老・田夫・牧童もすべて牛・羊・雉・麦・蚕・桑と溶けて一体となり自然の一部となつて、本当に一幅の「農家楽」の絶妙なる画面となつている。当然、これはただ詩人の感受性の中からしか湧き出ない画面なのであり、これは実に詩人独特のインスピレーションの画面である。開元時代の盛世における農民生活には安定した一面があるが、このように「閑

かで暢やか」なのは、当然にも詩人の心の投影でもあり、その中には詩人が現実生活の画面上に加えた一層の光彩がある。

青年詩人岑参と王維との違いは主として、盛唐時代の社会生活中、「閑逸」を同じように目にしたが、岑参はこれを追求することを明らかに示している。岑参の眼には、生活そのものには必ずや不足があるように、完善になるように加えねばならず、何かしらのものを「追求」しなければならなかった。南橋の車馬の喧騒が、たとえ彼の生活中の不足であろうと、干渉を受けない隠居生活こそ詩人が追求しようとするものである。岑参は世俗の生活とは対立する、世俗の拘束を受けない生活方式を確かに追求していたのであり、これは王維とは異なるが、より陶淵明には近い。王維の田園絵画中にも同じように理想の追求があるが、ただこの理想の生活はすでに現実のものとなっており、それには何の不足も存在しないので、これは岑参が感じる不足とは異なるところがある。表現の面では、王維が理想に対し明白な表明を示すことは非常に少ないのであるが、岑参はいつも直接に叙述しており、これは藝術的格調の上でも当然違いがある。

陶淵明の抑圧感は深刻なものであった。衰え頹れた世に生まれて、五斗米（わずかな俸禄）のために腰を曲げなければ餓えと寒さは免れがたいから、自分の志を守るためには饑寒を選ぶよりほかなく、この中にはやむをえない苦衷があり、犠牲もあり堪え忍ぶ他なかった。王維の閑逸は奥ゆかしく華麗で愛すべきものであった。太平の世に生れて、その適性を山水田園に解放し、富貴榮華を思い慕わず、悠然と淡泊であり、自から高尚な趣があった。岑参が追い求めたのは稚氣を帯びていた。「尚子」とか「蔣生」にせよ、「誓ひて將に道風に依らんとす」るにせよ、年若い詩人はたいへん気ままらしく、決してあまりまじめではなかった。

もし真面目であれば、「十年明王を干む」ことはなかったであろう。これはまさしく世間の閱歷がそれほど深くない心であり、浅い清らかな小さな溪流であって、含蓄の奥深い広大な青海原ではなかった。岑参の早期の山水田園詩の中の幽玄な情趣は稚氣を帯びているもので、彼の理想の傾向は天真爛漫であり、彼の追求には決して深刻な内容はないが、しかしその浅い清らかさは愛すべきものである。

山水田園詩は、山水隠逸派の作品で、この類の詩はそれぞれ違いがあり、その価値と意義について具体的に分析をしなければならない。

隠遁して仕えないということは、上古時代から、現実社会と対立する意義のある生活方式である。伝記によれば、許由は天下を譲ってやるという話を聞いたことで耳を汚されたと思い、それで潁水で耳を洗ったのである。巢父は耳を洗ったその水を不潔だとし、なんと牛を川の上流まで引張っていき水を飲ませたということ、これが千古の美談となっている。朝廷で名声を争い、市で利益を争うということは、奴隸主・封建主社会の中の人々の普遍的行為である。けれども、統治階級の人々の中にも、志を得ない人がよく現われ、彼らは名利の外に排除されている。

あるいは、その他の原因で統治階級の中からもかなり不満分子が出て来た。あるいはもとの統治集団が没落し、後から起こった者がそれらにとって替わったが、それに失敗したものは現実に対し不満を抱いた。あるいは社会の風習、個人の志向によって山林に隠遁した。以上述べたように、これらの人々は隠遁し世を避ける道を歩み始め、山林隠逸派になったのである。名利を切実に追求する人々と比べてみれば、山林隠逸派の方がより高尚であろう。中国の古代詩歌の中で、隠逸の生活を詠った作品には、現実生活に対抗する傾向がよくあった。これはただ消極的な対抗に過ぎないけれども、作品中の現実への不満、より理想的な生活を追求す

ることによって、それで必ず積極的な意義があるわけである。

長期にわたる封建時代社会の中、治世と乱世とが交替していき、異なった歴史時期の中では、異なった隠逸派が生まれる。陶淵明は東晋末年に生きた、末世の隠者である。末世に比べればさらに悪くなるのが、乱世であろう。乱世では隠遁は命を守る一手段であつただけでなく、理想社会のことなど気にかける暇もなかった。諸葛亮の「苟しくも性命を乱世に全うし、聞の諸侯に達するを求めず」⁽¹⁵⁾であつて、南陽郡にあつて身ずから畑を耕作し、あの「梁甫吟」を作つたのは、乱世の隠者であつたからだ。当時さらに焦光という隠士もいたが、流伝した作品はない。そのような時代では、山水田園詩も生まれようがなかった。

岑参の時代と以上述べた時代とは異なり、「開元の治」は、中国歴史上有名な治世の時代である。治世の時代にも山林隠逸派は存在した。西周の初期の伯夷・叔齊、前漢初期の商山の四皓（東園公・綺里李・夏黄公・角里先生）、後漢の初めの厳子陵らはすべて乱世は過ぎ、治世が開始した時の山林隠逸派である。唐の開元年間にも少なからずの「隠君子」が出現した。その中でかなりの人は「身は江海の上にあるとも、心は魏闕の下に存する」⁽¹⁶⁾で、終南山に住みつてはいるが、正に司馬承禎が言つたとおり、これは朝廷政堂に通じる一本の早道に過ぎなかった。そのほかかなりの人々は、当時流行した仏教・道教思想の影響を受け、深山の中に遁入し、丹薬を精錬し仙薬を飲み、辟穀し導引し、それで長生を求めた。また本当に世間の紛争に倦んだ人々がおり、自然の中に清浄さを求めた。ここには皇室の親戚・大小の官吏・文人学士などがおり、盛唐時代の膨大な隊列の山林隠逸派を構成している。しかし、どのような人であろうと、どのような目的を持っていようと、山林に逃げ入つた以上、必ず清くて高尚な顔つきをかもし出さねばならない。もし詩を作るのなら、

らば、魚や鳥や樹や泉や、自然や適性や、これらを謳歌するのは当然である。またこのような基礎の上にあつて盛唐時代の詩派の一つに発展し、それが田園詩派となつた。盛世の山林での隠逸は、つまるところ現実政治の付け合わせにすぎず、世俗の物欲生活に対する補いである。複雑な政治斗争の後では、清浄無為に對し羨望の心を生じており、ぜいたくな生活をし、でっぷり太つておれば、簡素素朴さに向かおうとする心が生じた。自然の風景、幽玄なる情緒は、それで現実生活の補充ともなり、一つの対立とも言えよう。当然このような対立は結局微弱なものになり、その思想的意義にも限りがある。しかしながら、唐人の山水田園詩には、自然の風光に對し新しいアプローチがあつて、それで我々の目に自然が永遠に新たまつていく様相を見せてくれる。詩人たちの山水田園詩に對する多様な藝術的感受性は我々の心を豊かにした。王維の「詩中に画有り」は、詩歌藝術中の貴重な宝の一つであつた。岑参の山水田園詩の藝術的成就是王維には及ばないが、しかし彼なりの特徴があり、百花園中の個性的な一枝である。

岑参の最初期の詩歌の中で、彼の藝術的才能はすでに現れている。彼は特徴を最も豊富に有する景物を取り上げ、自分のある種の具體的感性を表現するのが上手である。例えば「鞏北の秋、興ありて崔明允に寄す」⁽¹⁸⁾の中では、秋について具體的な感動が次のように描かれている。

白露披梧桐 白露 梧桐を披ひ

玄蟬昼夜號 玄蟬 昼夜号く

秋風萬里動 秋風 萬里動き

日暮黃雲高 日暮黃雲高し

この白露・玄蟬は秋特有の事物である。白露が梧桐の樹上に降りしき玄蟬の絶え間ない鳴き声に加わると、この感動の鮮明さがもっと一層進

むだろう。「秋風」という詩語はおのずと空漠としておりとりとめもなく、「西風」の方がより特色があるのにはおよばないが、だが「万里動く」という一表現があるだけで、大地の秋の気配は濃厚である。「日暮」という詩語も少し一般化されているが、ただ「黄雲高し」が秋の夕暮れ特有のものとなっている。というのは秋の雲の層がわずかでも高くなりさえすれば、太陽が沈むときこそはじめて黄雲が見えるからである。季節氣候の正確な選択が詩人の細致で微に入るインスピレーションの表現である。客観的事物の特点をつかめばつかむほど、藝術家としての才能をますます表現できる。さらに「縵山の西峰華堂の作」⁽¹⁹⁾の詩の中で「心魂を閑かにす」ことができる客観的環境についても、次のような風景を選び取っている。

日色隱空谷　日色　空谷に隠れ
蟬声喧暮村　蟬声　暮村に喧びすし

片雨下南澗　片雨　南澗に下り
孤峰出東原　孤峰　東原に出づ

野靄晴拂枕　野靄晴れて枕を拂ひ
客帆遙か入軒　客帆遙かに軒に入る

これらの自然の景色は、なんと閑かで、なんと自由自在なことか。これは客観的自然であるが、だが詩人の安らかなで閑かな心でもある。ましてかなり浪漫主義の詩人だといわずとも、自己の主観的情感を自然物の上によく加えようとし、自然を詩人自身の色彩に塗り上げる。たとえ客観的であろうと、自然を如実に模写する画面の時なら、どの詩人だって彼

自身のアングルを持ち、それぞれ異なる着眼点を選び、詩人はひたすら自己の必要にあった客観的景物を彼自身の藝術の中に再現する。岑参によつて描かれた縵山草堂にて見聞されたものは、客観的に存在した事物であるのはいうまでもないが、しかしながら、それらが現わしている様相は、詩人が心中に愛好し鑑賞し、陶醉するすがたであり、ここから我々は岑参の心の状態を見てとれるのである。この縵山の風景線は、実際でも岑参の心の風景線である。それは素朴で飾り気がなく単純で、美しいものであったのはいうまでもない。

岑参は詩章の末尾に意味深長な餘味を持たせるのが上手であつて、このような才能は早期から現われていた。たとえば「縵山西峰草堂作」という詩では、大量に「閑かなる心魂」の客観的風景と自分の主観的願望を描写したのち、末尾は次のように結ばれている。

尚平今何在　尚平　今　何くに在りや
此意誰與論　此の意　誰とともにか論ぜん
佇立雲去盡　佇立するに雲去り尽き
蒼蒼月開圓　蒼蒼として月圓を開けり

自分が問題を投げかけたのちに、「佇立」しているのは回答を待っているからであろうか。もちろんちがう。これは心魂が安らかなで閑かなる極致である。明代の鐘惺（一五七四～一六二四）⁽²⁰⁾が尾聯のあとに加えた標語の「静極れり」である。ここには当然、静けさがあるが、静はただ客観的環境でしかなく、ここで描写に重点が置かれているのは、主観的心境であるのが顯著である。それ故、「閑極れり」であるが、「静極れり」であるはずがない。この二句の末尾があつてこそ、詩全体の「閑かなる心魂」が画龍点睛と同じように仕上げられ、非常に意味深いものとなった。

初期の詩作の中で、岑参は短詩に關してかなり自在に運用できているが、やや長い詩についてはかなり構造上の缺點がある。例えば先の「潘陵尖より少室の居止に還りての秋夕の憑眺」という詩では、前八句は少室の住居の周囲の風景を描写し、続けて自分の心事を描いており、構造上から言えば、すでに一つの單元を完成している。そのあと続けて四句に、天壇の東に行った後、眼にした風景を描写しているが、この風景は少室の居止と大いに異なっているのは当然であるが、そのあとにまた心事を続けて記し、それはすでに描写したものとは何ら違つてはいない。異なる風景と、同じ心事とが明らかに重複しぐずぐずと引き延ばされている。さらにいえば前の「緱山西峰草堂にての作」という詩中でも、このような重複はより甚だしく、何句かは風景を描き、続けて情懷を抒べ、さらに何句か風景を記し続けて情懷を抒べており、前後四層の章法が同じで、明らかに裁断が足りないのだ。

岑参の山水田園詩は決して嵩陽に隠棲しているときだけにとどまらず後に彼が長安に來た以後もやはりこのような詩を作っている。たとえ仕官後の生活中においても、またたまにはこのような詩を作っている。しかし、嵩陽に隠棲している時期こそ始めて、山水田園が彼の作った詩の唯だ一つの領域であつたし、彼の思想感情こそ最も單純であつた。一たび闕下に手紙を献上し生活進路に変化が生ずれば、詩情はもうそれほど單純ではなくなる。官僚となつた後に、心境もまた大いに變化しており、早期とはさらに異なつた。しかも藝術的特徴からいえば、嵩陽に隠棲していた時期の山水田園詩中すでにあらまし備わっており、岑参の藝術的個性はすでに表現されている。

注二の3

(1) 「題平陽郡汾橋邊柳樹 參曾居此郡八九年」(陳鐵民・侯忠義『岑参集校注』卷一・六二頁)

此地曾居住 今來宛似歸 此地曾て居住し今來れば宛かも歸るに似たり

可憐汾上柳 相見也依依 憐れむべし汾上の柳 相見てもた依依たる

(2) 「主觀的インスピレーション」、原文は「主觀心靈」である。

(3) 「自潘陵尖還少室居止秋夕憑眺」(同上卷一・三頁)。すでに「第二章「嵩陽に隱る」2、青少年時代の生活」に言及される。

草堂近少室 夜靜聞風松 草堂少室(山)に近く 夜靜にして風松聞こゆ

月出潘陵尖 照見十六峰 月潘陵尖より出で 十六峰を照見す

九月山葉赤 溪雲淡秋容 九月山葉赤く 溪雲 秋容淡し

火點伊陽村 煙深嵩角鐘 火は点ず伊陽の村 煙深し嵩角の鐘

尚子不可見 蔣生難再逢 尚子見ゆべからず 蔣生再び逢ひ難し

勝愜只自知 佳趣爲誰濃 勝愜只だ自ら知るのみ 佳趣誰が為に濃かなる

昨詣山僧期 上到天壇東 昨は詣ず山僧との期 上り到る天壇の東

向下望雷雨 雲間見回龍 下に向へば雷雨を望み 雲間に回龍を見る

久與人羣疏 轉愛丘壑中 久しく人羣と疏にして 轉た愛す丘壑の中

心淡水木會 興幽魚鳥通
稀微了自釋 出處乃不同

況本無宦情 暫將依道風
將に道風に依らんとす

(4) 「春尋河陽聞處士別業」(同上卷一・二八頁)。

(5) 原注(二二頁)①兩句は陶淵明の詩『乞食』および『貧士を咏ず七首』之五に見える。

(6) 「尋鞏縣南李處子別居」(同上卷一・三頁)。

先生近南郭 茅屋臨東川
桑葉隱村戸 蘆花映釣船
有時著書暇 盡日窗中眠
且喜閭井近 灌田同一泉
先生南郭に近く 茅屋東川に臨む
桑葉村戸を隠し 蘆花釣船に映ず
時有りて著書の暇 尽日窗中に眠る
且つ閭井近きを喜び 灌田一泉を同
じうす

(7) 「澧頭送蔣侯」(同上卷一・五一頁)

君住澧水北 我家澧水西
兩村辨喬木 五里聞鳴鷄
飲酒溪雨過 彈棋山月低
徒開蔣生逕 爾去誰相攜
君は澧水の北に住み 我は澧水の西
に家す
兩村喬木辨じ 五里鳴鷄聞こゆ
酒を飲むに溪雨過ぎ 棋を弾ちて山
月低し
徒だ蔣生の逕を開くに 爾去りて誰
と相ひ攜へん

(8) 「終南東溪口作」(同上卷一・一二二頁)。

溪水碧於草 潺潺花底流
底に流る

沙平堪濯足 石淺不勝舟
沙平かにして足を濯ふに堪え 石淺

洗葉朝與暮 釣魚春復秋
くして舟に勝えず 葉を洗ふ朝と暮と 魚を釣る春また

興來從所適 還欲向滄洲
秋 興來り適する所に從ひ 還た滄洲に

(9) 原注(二四頁)①。玉国維『人間詩話』に見える。

(10) 王維「漢江臨眺」(『王右丞集』卷八)

楚塞三湘接 荆門九派通
江流天地外 山色有無中
郡邑浮前浦 波瀾動遠空
襄陽好風日 留醉與山翁
楚塞三湘に接し 荆門九派に通ず
江流 天地の外 山色 有無の中
郡邑 前浦に浮かび 波瀾 遠空を
動もす
襄陽 風日好し 留まりて酔はん山
翁とともに

(11) 王維「終南別業」(『王右丞集』卷三)

中歲頗好道 晚家南山陲
興來每獨往 勝事空自知
行到水窮處 坐看雲起時
偶然值林叟 談笑無還期
中歲頗る道を好み 晩に南山の陲に
家す
興來れば毎に独往す 勝事^{むな}空しく
知る
行き到る水の窮まる處 坐ろに看る
雲の起る時
偶然林叟に値ひ 談笑して還期無し

(12) 王維「鹿柴」

空山不見人 但聞人語響
空山人見えず 但だ人語の響きを聞
くのみ

返景入深林 復照青苔上

返景深林に入り 復た照らす 青苔の上

(13) 王維「竹里館」

獨坐幽篁裏 彈琴復長嘯

獨り坐す幽篁の裏 琴を弾じ復た長嘯す

深林人不知 明月來相照

深林人知らず 明月來たりて相照らす

(14) 王維「渭川田家」(『王右丞集』卷三)

斜光照墟落 窮巷牛羊歸

斜光墟落を照らし 窮巷牛羊歸る

野老念牧童 倚杖候荆扉

野老牧童を念ひ 杖に倚って荆扉に候つ

雉鳴麥苗秀 蠶眠桑葉稀

雉鳴きて麥苗秀ず 蚕眠りて桑葉稀なり

田家荷鋤至 相見語依依

田家鋤を荷って至り 相見て語依依たり

即此羨閒逸 悵然歌式微

即ち此に閒逸を羨む 悵然として式微を吟ず

(15) この両句は諸葛亮「出師表」(『文選』卷三七)の句で、「臣本布衣、躬耕於南陽。」に続く表現である。

(16) 「即有身在江湖之上、心遊魏闕之下」という表現が『舊唐書』卷一九二「隱逸」伝序に見える。以来、有名な文句である。

(17) 司馬承禎の伝は、新舊唐書の「隱逸」伝にある。

(18) 「鞏北秋興寄崔明允」(『岑參集校注』卷一・七頁)

白露披梧桐 玄蟬晝夜號

白露梧桐を披ひ 玄蟬晝夜号く

秋風萬里動 日暮黃雲高

秋風万里動き 日暮 黄雲高し

(19) 「緱山西峯草堂作」(同上卷一・八頁)

結廬對中嶽 青翠常在門

遂耽水木興 盡作漁樵言

頃來闕章句 但欲閑心魂

日色隱空谷 蟬聲喧暮村

曩聞道士語 偶見清淨源

隱几閑吹葉 乘秋眺歸根

獨遊念求仲 開徑招王孫

片雨下南澗 孤峰出東原

棲遲慮益澹 脱略道彌敦

野靄晴拂枕 客帆遙入軒

君子休明を佐け 小人蓬蒿を事とす

所適在魚鳥 鳥能徇錐刀

孤舟向廣武 一鳥歸城皋

勝概日相與 思君心鬱陶

君子休明を佐け 小人蓬蒿を事とす

適う所魚鳥に在り 鳥んぞ能く錐刀に徇わんや

孤舟広武に向かひ 一鳥城皋に帰る

勝概日々相ひ与にするも 君を思へば心鬱陶

廬を結んで中嶽に対し 青翠常に門に在り

遂に水木の興に耽けり 尽く漁樵の言を作す

頃來章句を闕き 但だ心魂を閑かにせんと欲するのみ

日色空谷に隠れ 蟬聲暮村に喧し 曩に道士の語を聞き 偶々清淨の源を見る

几に隠りて吹葉を閑し 秋に乘じ帰根を眺む
独り遊んで求仲を念ひ 徑を開きて王孫を招く
片雨南澗に下り 孤峰東原より出づ
棲遲 慮益々澹く 脱略 道彌々敦し
野靄晴れて枕を拂ひ 客帆遙かに軒に入る

尚早今何在 此意誰與論

尚早今何にか在る 此の意誰とともに論ぜん

佇立雲去盡 蒼蒼月開園

佇立するに雲去り尽き 蒼蒼として月園を開く

(20)

鐘惺、明の竟陵人。字伯敬、号は退谷、萬曆三十八年進士。詩を能くし画も上手で、彼の詩は「幽深古峭」といわれる。同郷の譚元春とともに「性靈を抒写すること」を提倡し、公安派に引き続いて当時の「前後七子」の「懷古」に反対し、彼ら二人の作風は「竟陵体」と呼ばれた。ここは『唐詩歸』の評語である。

三、「兩郡に出入」

1、「明王を干む」

一從棄魚釣 一たび魚釣を棄てしより
十載干明王 十載 明王を干む

(「大梁に至り却つて匡城主人に寄す」)

岑参はどうして心より愛好していた魚釣り木こりの生活を投げ捨て、長期間にわたって手を緩めることなく仕進を追い求めたのか。原因は簡単のように見えるけれども実は少し複雑なのである。

自憐無舊業 自ら旧業無きを憐れみ

不敢恥微官 敢へて微官たるを恥じず

……

祇緣五斗米 祇だ五斗米に緣り

孤負一漁竿 一漁竿に孤負すのみ

(「初めて官を授かり高冠草堂に題す」)

と詠い、また

所嗟無産業 嗟く所産業無きこと

妻子嫌不調 妻子調はざるを嫌ふ

五斗米留人 五斗米人を留め

東溪憶垂釣 東溪に釣を垂れしを憶ふ

(「郡守に衙して還る」)

家が貧乏で仕進を求めること、これは岑参自身述べたことがある理由であり、たいへん根拠のある理由でもある。先祖が何らの遺産を残さず、食うことと家族を養うため、何文かの俸給、何石かの禄米を求めるのは、当然何ら指弾されるところはない。岑参はただ自分が家の貧乏で仕官を求めるだけでなく、彼は自分以外の官給によって家族を養う人に対しても同情していた。

不擇南州尉 択ばずして南州の尉たるは

高堂有老親 高堂に老親有ればなり

(「張子南海に尉たるを送る」)

不須嫌邑小 須く邑の小さを嫌ふべからず

莫即恥家貧 即ち家の貧なるを恥ざる莫かれ

更作東征賦 更に「東征の賦」を作るに

知君有老親 知りぬ 君に老親有るを

(「李郎の武康に尉たるを送る」)

彼と張子や李郎とは、この点において共通する言葉がある。貧乏で仕官を求めること、唐代の士大夫中において一定の比率を占めており、科舉制度により士人たちに一本の脱出路が与えられ、功名富貴という手立て

で社会の反対勢力を減らした。

しかし、岑参が仕官を求めたのは家が貧乏であっただけだというのは恐らく問題を簡単にみすぎることになるだろう。李白は決して貧乏ではなく、彼が東南を放遊していたときには三十万金を散財してしまった。これほどの大金なら、自分が安定したゆとりある生活を過ごすことは保証されうる。だが李白も官僚になろうと探り求めたのは、別の原因すなわち自分の抱負実現のためである。杜甫の「君を堯舜の上に致し 再び風俗をして淳ならしむ」は一つの抱負であり、一つの政治思想である。封建時代の士大夫の子弟は、その政治的理想は多くが儒家の範疇に属し、岑参も例外とはなりえず、彼も「堯の時代」「舜の風化」に服膺する一派であった。「窮まれれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」(「孟子」 尽心篇上)ること、世を濟くい邦を治めるということが常々過去の士大夫たちの抱負であって、仕進を求めることが世を濟くい国を治めることに到るに必ず通っていく路である。岑参が官途に上るのも当然、世を濟くい国を治めようとし、一つの功業をうち建てたいと思うものである。

さらにもう一点ある。岑参は幼年時代貧乏であっただけでも、彼の先祖は富貴の家柄であった。富貴から貧窮になれば、世間の人情の変わりやすさを見尽くし、どうしても世に対する不平の感を抱くのはまぬがれがたい。岑参は後になって嘉州刺史を罷め、成都に客遇していた折の、「西蜀の旅舎にての春の嘆き、朝中の故人に寄せ狄評事に呈す」詩中にも「回瞻す 后来の者 皆輻輳を肆いままにせんと欲す」という話がある。古詩の「今日良き宴会」の話も憤激の表現となっているのは要路への渡し場に抛ることができず貧賤の身の上をかこつことに感じてこそこのような感慨を発するからである。正しく魯迅(一八八二—一九三六)

の小説『孤独者』の魏連受が官となって終わったのと同じで「惨傷の中に憤怒と悲哀とがはさまっている」ものなのだ。もともと社会での権勢におもねるやからを嫌厭する魏連受は権勢利益を手に入れ社会に報復せざるをえないのである。このような憤慨は少しかたよかったものであって、岑参のおだやかで正しい人となりとはマッチしない。ただし岑参の「感舊の賦」にも憤激が述べられており、彼の個人的家柄の榮辱の変遷と世間人情の変わりやすさに対して深く感じるところがあった。ここでは、岑参の心の中の秘密、彼の仕官希求には内心の憤慨の情が含まれていることを伺い知ることができる。岑参が仕進を追求する道程を歩みはじめのちは、ずっと順調にはいかず、「兩郡に出入すること。十秋蹉跎たり」であって、これで彼は非常に慨嘆し、最後には不平不満をもらす「感舊の賦」を著し、憤慨の中にも祈求を帯びたものとなっている。

岑参が「十年、明王を干む」る期間、唐王朝はちょうど転変の過程にあった。唐の玄宗は段々と年老いて来、政事にも厭きて享楽に耽っていた。玄宗は朝政を手放し奸相・李林甫に委ねたように、盛唐の光輝ががやく局面が上述のごとくゆつくりと終わりにかけていた。李林甫だって少しも立派なことをしなかったわけではなく、彼が政務を執つてのち、平糶法を採用し、豊年には大量に穀物を貯蔵しておき、凶作の歳になったとき、取り出して用い、それによって凶年に朝廷が洛陽まで行き食にありつく煩しさを免れた。ただし、この人は賢人を妬み才能ある人を忌みきらい、権力欲もはなはだ旺盛であり、他人を排斥する表と裏のある二面派の手法が甚だしく陰險であった。彼はあまたの卑劣な手段で皇帝の信任を得ると、色々な手を尽くし自分の地位を固め、一切の現実的・可能的・潜在的な、甚だしくは想像上の競争相手に対してまで、陰謀をめぐらした手段を用い予め排除した。下から上ってくる才知の士に対して

も、李林甫はあらゆる方法をあみ出し抑圧し踏みにじった。これでは、才能を持ちながらも不遇である士人を沢山作り出したのはいうまでもない。李白は四川から長安にやって来たが、すぐにこの李林甫に遭遇し、圧迫され都を出なければならなかった。杜甫が出世出来なかったのも初めはやはり李林甫のせいであった。高適は盛唐詩人のなかで最も官歴が高くなったが、それも後の肅宗（在位七五六～七六二）の朝廷のときであり、開元・天宝年間では彼も鬱鬱として出世できず、まもなく五十歳になろうとするころ、ようやく人の推薦により小さな封丘県尉（河南省）となった。このような局面では、岑参が出世できないのもおどろくほどのこともない。

開元二十二年、岑参は二十歳である。唐律の規定によると、男は二十で丁男となり、徭役に服さねばならない。岑参は父親が刺史であったので、その子弟たちは徭役が免除されるのであり、これは特権であったが、ただ二十歳になって成人とみなされた。まさにこの年、李林甫が宰相の地位にはい上り、岑参は嵩山の隠棲地から洛陽にかけつけ「書を闕下に献じた。」これは若者の幻想にとらわれた幼稚な行動にすぎないのはいうまでもないことで、というのはこのようなやり方では確かに効果を上げられるはずもない。当時、岑参は無名の若者であり、彼には王維のように「鬱輪袍」を演奏できるような特技もないばかりか、王維がかつて探しあてた貴公主（安樂公主）と同じような権勢を持った、自分を支持してくれるような人に会えるはずもなく、当然彼は失敗した。手紙を差し上げること賦を献上することは正常の科擧とは異なり、一つの特殊な入り口であって必ず最高実権保持者のおめがねにかなわねばならず、それでこそようやくとした官職を手に入れられようが、年若い岑参がこんなことまで出来なかったのはいうまでもない。

「西郡に出入す」とは、実際には東都と西京とに出入することである。長安・洛陽は唐代の都であり、一般の州郡とは大いに異なっていた。開元二十二年から開元二十四年まで、岑参は東都洛陽に出入した。この間「献書」以外、同時にまた父祖の昔なじみに拜謁するような活動を行った。ある尚書大人はこの時岑参に会い彼に一着の綈袍を与えた。皇帝は洛陽に滞在しており、年末年始にはかなり慶祝活動があるので、岑参も恐らく見に行こうとしたのであろう。開元二十四年正月十五日、玄宗皇帝は命令を下した。洛陽から三百里（約七キロ）以内の各州県の長官はすべて自らが所管する楽隊を引きいて都城に来てコンクールをせよと。当時、懷州刺史は皇帝の歓心を得るために、新しい妙案を考えついた。

彼が三百人の膨大な楽団を引きつれ、牛車に乗って洛陽にかけつけるのに、車を引っ張る牛にみな虎・豹・象・犀などの形の張子の上着をつけさせた。見物でにぎやかな人々は身動き出来ないほど多く、皇帝の御衛隊が大きな棍棒を雨のように打ちおろしても追ひ払えないほど、本当にこの上なくにぎやかであった。魯山県令・元徳秀は反ってたった七人だけしかひきいて来ず、手と手と連ねて「于鵠」という歌を唱った。もつともらしい態度をとる皇帝は突然不機嫌となり、懷州刺史に対して不満を感じた。皇帝は言う、「このように豪勢にふるまって、懷州の民衆たちはそれでもよい暮らし向きがおくれるのか」と。たちまち命令を下し、その刺史を重要でない官吏に降格した。しかし一方、元徳秀のような人民のために節儉に励む官僚も決して褒美をもらえたわけではない。元徳秀は後に陸渾で貧窮に死ぬが、妻子子供さえおらず、陸渾県尉であった喬潭が自己の給料から出してようやく彼を埋葬できたのである。このような歌のコンクールを見たことがあり、少しでも民主思想の持ち主ならおそらく調刺の詩一首でも作ろうとするだろう。しかし岑参にはこのよ

うな詩はなく、もしかしたら彼は慎重細心であったかもしれない、あるいは彼は皇帝が懷州刺史を罷免したやり方に困惑していたのであろう。

開元二十四年年末、唐・玄宗皇帝は又西京・長安にもどり、しかもこの時以後もう洛陽に来ることはなくなった。政治の中心が一たび移ってしまったと、洛陽の地位はもう以前ほど大きくはなくなり、とりわけ仕進を求める人は、おのずと西京に行き運に巡り会うようにするほかない。岑参はおおよそ膨大な中央政權官僚の隊列の後ろについて長安に到り、科擧の試験が正月に行われるために、第二年目年初になって出発したのでは受験に間に合わなくなってしまう。しかし、この時期の受験でも、岑参はまたもや及第でさず、二月発表の後、岑参は家に引き返すほかなかった。彼が長安を離れ、東に行き潼関に着いて、関所の門上に一首書き付けた。

來亦一布衣 來るも亦一布衣

去亦一布衣 去るも亦一布衣

羞見関城吏 関城の吏に見ゆるを羞じ

還從舊道歸 還た旧道より歸る

岑参は五絶は七絶のうまさにはるかに及ばないが、ただ自己の特色を持っている。単純、自然、話すように明白なことである。前漢の終軍が函谷関より（関中に）入るとき繻（婦りの通行手形）を棄てたという典故がこの「戯れに関門に題す」の詩中に含まれているが、この典故を知らない人でも、詩の理解については少しも影響がない。それは丁度「尚書旧を念ひ袍衣を垂賜す。率かに絶句を題し献上して以て感謝を申す」詩中の「更に綈袍の贈有り、猶お故人の憐れみを荷ふがごとし」の句のように戦国時代・范雎の物語を用いているが、范雎を知らなくとも同様に詩句に含まれる意味が了解できるのと同じである。岑参が西の方関中に入っ

たのも、一舉に名を成そうという考えを抱いていたが、今素手で歸るのは、やはり普通の人であり、それで「羞」という字があるのは、本当のことであろう。ただ詩題中に「戯」という字があるのは、あまり真面目でないようである。この年、岑参はようやく二十三歳で、まだ年若く、未来に対し希望に溢れているので、それで詩中には絶望の調子がない。

おそらくこの年の前後に、岑参は結婚した。唐代は隋末の大乱の後に続いて、人口が激減し、人口増加をもたらず早婚政策を採用してようやく人口が回復してきた。高宗の永徽三年（六五二）は唐朝開国からすでに三十年余り経ているが、全国の人口はまだ二千万だけしかなかった。玄宗の開元二十八年（七四〇）になると、全国の人口はすでに四千八百万に達した。人口の大幅な増大は主として社会の安定によるのであるが、ただ人口政策の促進も一原因である。「夜盤豆を過ぎ河を隔てて永楽を望み閨中に寄す、齊梁体に效ふ」という詩は、岑参が結婚してまもなく長安へ赴く途中での作品である。

盈盈一水隔 盈盈として一水隔て

寂寂二更初 寂寂たり 二更の初め

波上思羅袜 波上 羅袜を思ひ

魚邊憶素書 魚辺 素書を憶ふ

月如眉已画 月は眉の已に画きしが如く

雲似鬢新梳 雲は鬢の新たに梳るに似たり

春物知人意 春物 人の意を知り

桃花笑索居 桃花 索居を笑ふ

これは岑参のわずかに残る閨情詩である。それは六朝の「宮体」詩が閨閣の瑣末な事を描く点で似てはいるが、情感の真挚で切実な点でかえって違いがある。岑参は新婚まもない婦人に対し頗る気に入っており、

「羅袿」という表現によって、岑参が夫人のことを魏の曹植が「洛神賦」中に描いたような洛神（洛水の女神）とみなしていたことがわかる。眉と鬢の比喻と聯想とから、夫人の容貌と豊かな風采がみてとれる。「桃花 索居を笑ふ」という句から、夫妻の間柄の情趣が想見できる。「齊梁体に效ふ」とはいつても、ここには綺麗や頽廃など存在せず、自然さと清新さがあるだけである。盛唐は自から盛唐なのであり、岑参は自から岑参なのであって、古に效うことによって自己本来の姿を失ってしまふことなどなかったことが知れよう。

岑参が兩郡に出入りしていた時期、京・長安と洛陽との路を駆け回った具体的回数を詳しく知ることは不可能である。洛陽から長安への道程は決してそう遠くはなく、全て八〇〇里（四〇〇km）余りであり、また兩京の間には、道にそって多くの宿駅が設けられている。例えば、岑参の詩に言及されている磐豆もその一つで、磐豆の東の稠桑もその一つであり、どちらも現在の靈宝県境の黄河沿いにある。唐代では館驛使が設置されており、専門的に交通施設を管理し、長安・洛陽間の道路はさすがにいつも修繕されていた。このため、長安・洛陽間を旅行するのは、当時でもかなり便利であった。岑参が官を授かる前後、幾度も長安・洛陽間を往復しているが、しかしそれ以前、彼の基地は潁陽にあり、それ以後、彼の基地は長安にあった。

岑参の詩中には長安・洛陽道中の作がかなりある。その中で「十載明王を干む」期間の作とおおむね判定できるものは、「戯れに関門に題す」・「夜盤豆を過ぎ河を隔て永楽を望み閨中に寄す、齊梁体に效ふ」の二首以外にも、さらに「関西の客舎に宿し山東の敵・許二山人に寄す」・「永楽の韋少府の廳壁に題す」・「晩に盤豆寺を過ぎり鄭和尚に禮す」・「東山に還る洛上の作」・「東のかたに歸り晩に潼関に次す、懷古」な

どがある。これらの詩はすべて五言詩である。これらの詩に一貫する共通の特徴は、形象思惟が際だっていることである。例えば「関西の宿舎に歸り山東の敵許二山人に寄す」の前半四句は、

雲送関西雨 雲は送る 関西の雨

風傳渭北秋 風は傳ふ 渭北の秋

孤灯燃客夢 孤燈客夢然え

寒杵鄉愁搗 寒杵 郷愁を搗つ

この四句の詩は樂府詩に採用され（「長命女」と名付けられる。『樂府詩集』卷八十・近代曲辭）取り入れられたのは、思うにその原因がないわけではなく、確かに描きかたがかなり際だっている。旅舎の秋の夜、北風が雨を送ってきて、孤灯の下旅人は故郷に帰った夢をみているが、寒風中に伝わる衣を搗つ音に醒されるとあるように、故郷を思う心を引き起こすことが、短い数語によって、旅の身空の愁思が確実に形象化され表現されている。時間・地点・景物・思いが十分に具体化され、ありりと絵のようである。さらには「永楽の韋少府の廳壁に題す」の詩も、その南郊のそと大河流れるところ、あたり一面たちこめる暗い煙霧、韋公の役所上空を飛翔する白鷗・県の北側に雄大にそびえ立つ中条山が描かれ、その風景描写も非常に生き生きしている。「東山に還る、洛上の作」詩中、夕陽のもとの一葉の小舟、河中の急急と流れる水、岸边に入り乱れる春の花花、天空の雲の開けたところの虹、船の舳で櫂の音に驚かされるカワ鶉、これらすべてが故郷を思うものの眼中にきらめいた。昔、ある人が岑参の詩を評論して「景語を為すを善くす」（風景を詩中に描くのが上手）といっているのは、これら幾首かの詩からみても、間違っていない。

注三の1

(1) 「至大梁却寄匡城主人」(『岑参集校注』卷一・四二頁)

一從棄魚釣 十載干明王 一たび魚釣を棄てしより 十載明王
を干む
由りて天階に謁する無く 却つて滄
浪に帰らんと欲す
無由謁天階 却欲歸滄浪

仲秋至東郡 遂見天雨霜 仲秋東郡に至り 遂に見ゆ天霜を雨
(ふ)らすを

昨夜夢故山 蕙草色已黃 昨夜故山を夢み 蕙草色已に黄ばむ
平明辭鐵丘 薄暮遊大梁 平明に鉄丘を辞し 薄暮に大梁に遊
ぶ

仲秋蕭條景 拔刺飛鵝鶻 仲秋蕭條の景 拔刺 鵝鶻飛ぶ
四郊陰氣閉 萬里無晶光 四郊陰氣閉ざし 萬里晶光無し
長風吹白茅 野火燒枯桑 長風白茅を吹き 野火枯桑を燒く
故人南燕吏 籍籍名吏香 故人南燕の吏たり 籍籍として名吏
に香る

聊以玉壺贈 置之君子堂 聊か玉壺を以て贈り 之を君子の堂
に置かん

(2) 「初授官題高官草堂」(同上卷一・五二頁)

三十始一命 宦情都欲闌 三十にして始めて一命あり 宦情都
て闌きんとす
自憐無舊業 不敢恥微官 自ら舊業無きを憐れみ 敢えて微官
たるを恥じず
潤水吞樵路 山花醉藥欄 潤水樵路を呑み 山花藥欄に酔ふ
祇緣五斗米 孤負一漁竿 祇だ五斗米に縁り 一漁竿に孤負す

(3) 「衙郡守還」(同上卷三・二二頁)

世事何反覆 一身難可料 世事何ぞ反覆するや 一身料るべき
こと難し
頭白翻折腰 歸家還自笑 頭白く翻つて腰を折り 家に帰り還
た自ら笑ふ

所嗟無產業 妻子嫌不調 嗟く所産業無きこと 妻子調はざる
を嫌ふ

五斗米留人 東溪憶垂釣 五斗米人を留め 東溪に釣を垂れる
を憶ふ

(4) 「送張子尉南海」(同上卷五・四〇九頁)

不擇南州尉 高堂有老親 不擇南州尉 高堂有老親 高堂に老
親有ればなり

樓臺重蜃氣 邑里雜蛟人 樓臺蜃氣重なり 邑里蛟人雜はる
海暗三江雨 花明五嶺春 海暗く三江雨り 花明かに五嶺の春
此郷多寶玉 慎莫厭清貧 此の郷宝玉多し 慎みて清貧を厭ふ
莫かれ

(5) 「送李郎尉武康」(同上卷五・三九八頁)

潘郎腰綬新 雪上懸花春 潘郎腰綬新に 雪上懸花の春
山色低官舍 湖光映吏人 山色官舍に低れ 湖光吏人に映ず
不須嫌邑小 莫即恥家貧 須らく邑の小さを嫌ふべからず
更作東征賦 知君有老親 即ち家の貧なるを恥じる莫れ
更に東征の賦を作り 君に老親有る
を知る

(6) 原注。『孟子』尽心篇上。

(7)

「西蜀旅舍春嘆寄朝中故人呈狄評事」(同上卷四・三七五頁)

春與人相乖 柳青頭轉白
生平未得意 覽鏡心自惜

四海猶未安 一身無所適

自從兵戈動 遂覺天地窄

功業悲後時 光陰嘆虛擲

却爲文章累 幸有開濟策

何負當途人 心無衿窘厄

回瞻後來者 皆欲肆轡轡

起草思南宮 寄言憶西掖

時危任舒卷 身退知損益

窮巷草轉深 閉門日將夕

橋西暮雨黑 籬外春江碧

作者初識君 相看俱是客

春人と相ひ乖き 柳青く頭轉た白し
生平未だ意を得ず 鏡を覽て心自ら
惜しむ
四海猶は未だ安からず 一身適く所
無し

兵戈動きて自從り 遂に天地の窄き
を覺ゆ
功業時に後れしを悲しみ 光陰虚し
く擲つを嘆く
却って文章の累と為り 幸いに開濟
の策有り

何ぞ當途人に負わんや 心に窘厄を
衿む無し
回瞻す後來の者 皆轡轡を肆にせん
と欲す
草を起すに南宮を思ひ 言を寄すに
西掖を憶ふ
時危くして舒卷に任せ 身退きて損
益を知る
窮巷草轉た深く 門を閉じ日將に夕
ならんとす
橋西暮雨黒く 籬外春江碧なり
昨は初めて君を識り 相看れば俱に
是れ客なり

聲華同道術 世業通往昔 聲華道術と同じく 世義 往昔に通

早須歸天階 不能安孔席 早く須く天階に歸るべし 孔席に安

吾先稅歸鞅 舊國如咫尺 吾先ず歸鞅を稅かん 旧国咫尺の如

(8) この「古詩十九首」の第四首は、次のごとく締めくくる。(「文

選」卷二九)

何不策高足 先據要路津 何ぞ 高足に策うち 先ず要路の津

(9) 一九二五年に書かれた魯迅の小説『彷徨』に収載。

(10) 「孤独者」の結末部からの引用。「……像一匹受傷的狼、当深夜在

曠野嗥叫、慘傷裏夾雜憤怒和悲哀。」

(11) 岑參「感舊賦」(「岑參集校注」)卷五・四三九頁)からの引用。

(12) 原注。「王維は岐王のおかげで安樂公主に引見せられ、琵琶曲

『鬱輪袍』を奏で、并せて詩を献上したところ、公主は進士解元

(第一番)に推薦した。この事は『太平広記』収載の『集異記』

(13) 「戲題關門」(同上卷一・一三頁)

(14) 「尚書念舊、垂賜袍衣、率題絕句、獻上以申感謝」(同上卷四・

三三八頁)

富貴情還在 相逢豈間然 富貴 情還た在り 相逢うて豈に間

然せんや

綈袍更有贈 猶荷故人憐

綈袍 更に贈有り 猶ほ故人の憐み
を荷ふがごとし

- (15) 「夜過盤豆、隔河望永樂、寄閨中、效齊梁體」(同上卷一・一五頁)

- (16) 「宿關西客舍、寄東山嚴許二山人、時天寶初七月初三日在內學、見有高道舉徵」(同上卷一・四〇頁) 前半は『樂府詩集』「長命女」に再録。

雲送關西雨 風傳渭北秋 雲送る関西の雨 風伝ふ渭北の秋
孤燈然客夢 寒杵搗鄉愁 孤燈 客夢然え 寒杵 郷愁搗つ
灘上思嚴子 山中憶許由 灘上に嚴子を思ひ 山中に許由を憶ふ

- (17) 「題永樂章少府廳壁」(同上卷一・一七頁)

蒼生今有望 飛詔下林丘 蒼生今望み有り 飛詔林丘に下さる
大河南郭外 終日氣昏昏 大河南郭の外 終日氣昏昏たり
白鳥下公府 青山當縣門 白鳥公府に下り 青山県の門に当る
故人是邑尉 過客駐征軒 故人は是の邑の尉 過客 征軒を駐む
不憚煙波闊 思君一笑言 煙波闊きを憚らず 君を思ひ一たび
笑言す

- (18) 原注「原作の盤石寺・夜過盤石などは、すべて盤豆となすべきである。」「晚過磐石寺禮鄭和尚」。(同上卷一・一六頁)

暫詣高僧話 來尋野寺孤 暫し詣ず高僧の話 来り尋ぬ野寺孤
なり
岸花藏水碓 溪竹映風爐 岸花水碓を藏し 溪竹風爐に映ず
頂上巢新鵲 衣中帶舊珠 頂上新鵲巢くう 衣中旧珠帶ぶ

談禪未得去 輟棹且踟躕 禪を談じ未だ去るを得ず 棹を輟め
て且く踟躕す

- (19) 「還東山洛上作」(同上卷一・一〇頁)

春流急不淺 歸棹去何遲 春流急にして浅からず 帰棹去くこ
と何ぞ遅きや

愁客葉舟裏 夕陽花水時 愁客 葉舟の裏 夕陽 花水の時
雲晴開蟬螻 棹發起鸕鷀 雲晴れ蟬螻開き 棹発し鸕鷀起つ
莫道東山遠 衡門在夢思 道ふ莫かれ東山遠しと 衡門 夢思
に在り

- (20) 「東歸晚次潼關懷古」(同上卷一・一一頁)

暮春別鄉樹 晚景低津樓 暮春郷樹に別れ 晚景津樓低し
伯夷在首陽 欲往無輕舟 伯夷首陽に在り 往かんと欲するも
輕舟無し

遂登關城望 下見洪河流 遂に関城に登りて望めば 下洪河の
流るるを見ゆ
自從巨靈開 流盡千萬秋 巨靈開いてより 流れ尽きぬ千万の
秋
行行潘生賦 赫赫曹公謀 行行たり潘生の賦 赫赫たり曹公の
謀

川上多往事 淒涼滿空洲 川上往事多く 淒涼として空洲に満
つ

- (21) 例えば、張學思「論岑參詩歌的藝術風格」(『全國唐詩討論會論文選』霍松林主編・一九八四)に「岑參最喜歡寫景、也善於寫景」とある。

※『岑參評傳』一は福岡教育大学紀要第四十三号第一分冊に掲載。